

大学の国際化推進のためのFDワークショップ

—教育の国際標準を学ぶ—

—大阪大学での取り組みを通して—



海外交流

有川友子*

FD workshop for internationalization of university, learning the international standard in education : An experience at Osaka University

Key Words : FD, internationalization, education, university, learning and teaching

I. はじめに

近年、日本の大学においてもファカルティ・ディベロップメント(以下、FDと略す)の様々な取り組みが行われている。FDは大学教育審議会(1998)によると「大学の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修」とされている。大阪大学においても大阪大学大学教育実践センターや各部署等においてさまざまなFDが行われている。本稿では、大阪大学の国際化との関連からの全学的なFDの取り組みについて、特に平成17年度実施のFDワークショップについて紹介する。そして、今後の展望について述べていきたい。

II. 大学の国際化推進のためのFDワークショップ

大阪大学の国際化推進のためのFDワークショップは平成16年度^注と平成17年度に実施された(有川, 2004)。平成17年度のFDワークショップは「大学の国際化推進のためのFDワークショップ—教育の国際標準を学ぶ—」実施委員会が主催し、大学教育実践センターと留学生センターが共催して9月5日(月)～9日(金)に実施した。各研究科から7名の教員の参加があった。このFDワークショップの概要を表1に示した。このワークショップはFD実績と評価の高い北米マギル方式にて、平成16年度同様、大学教育とFDの専門家

Denis Berthiaume氏を講師として招聘し、英語にて実施した。平日5日間毎日午前にはその日のテーマについて講義と実習を通して、参加教員が担当する科目についてシラバスを作成していった。午後2回は模擬授業を行った。

このマギル方式FDワークショップでの相互方向的な講義、実習、模擬授業、全ての体験を通して、参加教員は「学習者中心のアプローチ(Learner-centered Approach)」について、単に知識として学ぶだけでなく、感じ、習得していった。表2に平成17年度FDワークショップ参加教員の声から一部を紹介する。

平成17年度においては、上記FDワークショップのほかにFD関連企画として、9月1日(木)午後、平成16年度FDワークショップ参加の教員対象のフォローアップセミナーを実施し、6名の教員の参加を得た。また、9月2日(金)午後FDセミナーを実施し、学内外から29名の参加を得た。第1部ではFDワークショップ講師Denis Berthiaume氏による「学習者中心のアプローチ」について講演があり、第2部のパネルディスカッションでは、平成16年度のFDワークショップ参加教員3名が、FDワークショップ終了後の実践体験について報告し、フロアとディスカッションを行った。

III. 今後の展望

平成17年度FDワークショップにおいては、使用言語は英語であったが、英語による講義に限るのではなく、教育について国際標準から考えるということで「教育の国際標準」というテーマのもとに実施した。

平成16年度のFDワークショップ参加者の声を踏まえ、平成17年度は夏季休業中の9月初旬にFDワークショップを実施した。しかし、予算の関係で、参加

*Tomoko ARIKAWA
1993年University of Illinois at Urbana-Champaign, Education修了, Ph.D.
現在, 大阪大学, 留学生センター, 助教授,
教育人類学, 異文化間教育学
TEL 06-6879-7075
FAX 06-6879-7075
E-mail : tarikawa@isc.osaka-u.ac.jp

案内の通知が十分早く行えなかったため、関心はあるものの、FDワークショップ期間中に既に予定があり、参加できない教員もいた。結果として文系および理系の各研究科から7名という少人数の参加者があった。しかし17年度FDワークショップ参加者からも非常に高い評価を得た。

大学における教育の重要性、学生すなわち学習者の視点の重要性について認識している教員は多いと思う。しかしそれは知識のレベルにとどまることが多い。過去2年間、このマギル方式FDワークショップを大阪大学にて実施する中で実感するのは、このFDワークショップは、正にマギル方式が目指すものであるが、教員に対して、大学教育及び学習者の視点の重要性を、知識のレベルだけでなく、情感や行動のレベルも含めて習得する機会を提供していることである。

このことは過去のFDワークショップ参加教員の意欲と熱意からも明らかである。FDワークショップ参加教員からの提案を受けて、17年度のFDワークショップ終了後、16年度と17年度のFDワークショップ参加教員数名及び実施関係者数名から組織構成し、これからの大阪大学における国際化推進のFDに関する研

究計画を立てた。来年度以降の同様のFDワークショップの実実施計画のみならず、大阪大学の国際化を目指すFDプログラム開発の計画も含め、現在研究申請中である。

こうして大阪大学の国際化推進を目指すFDワークショップに関する取り組みは更に進み、着実な歩みのために時間はかかるかもしれないが、ひいては教員による大学教育に対する意識及び行動の変革へとつながっていきそうな勢いを感じている。

注：大阪大学における英語による講義のためのFDワークショップ実施にいたる経緯及び平成16年度実施の報告については拙稿(2004)を参照。

引用文献：

有川友子, 2004, 「大阪大学における教育の国際化への取り組みー「教育の国際化推進のためのFD事業：英語による講義のためのワークショップ」を終えてー」, 『大阪大学大学教育実践センター紀要』, 第1号, pp. 97-105.

大学教育審議会, 1998, 『21世紀の大学像と今後の改革方策について(答申)ー競争的環境の中で個性が輝く大学ー』, 平成10年10月26日大学審議会.

表1：FDワークショップの概要

| | | |
|---------|---|---|
| 内容 | ワークショップにおける毎日のテーマ(1日目：Content, 2日目：Outcome, 3日目：Strategy, 4日目：Assessment, 5日目：Next Step)について、参加者は講義を受け、実習にて自分の担当する講義のシラバスを検討し、作成していった。また、午後2回のマイクロティーチングを通して、講義スタイルや方法についても実践的に学んだ。 | |
| A 午前 | 講義 | その日のテーマについて、FDの経験豊富な講師から講義を受けた。そのテーマについて、過去のワークショップ参加者2名が報告を行った。 |
| | 実習 | 講義や過去のワークショップ参加者からの報告を参考に、テーマごとに自分の担当する科目について検討し、具体的にシラバスを作成した。 |
| B 午後 | マイクロティーチング | 参加者は二つのグループに分かれ、午後2回(月・水曜班と火・木曜班)のマイクロティーチングを行った。 参加者は自分の担当する科目について1人あたり10-15分の模擬授業を行い、講師および他の参加者からのコメントやフィードバックを得た。模擬授業はビデオ撮影後、参加者自身にテープが渡され、1回目のマイクロティーチング終了後、参加者は自分の模擬授業のテープを観て、改善点等を検討し、それを踏まえて準備を行い、2回目のマイクロティーチングを行った。 |

表2：平成17年度FDワークショップの参加者の声から一部紹介

| 項目 | 参加者の声 |
|--------|---|
| 良かった点 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 大変いい企画を手配していただきありがとうございました。正直なところ、はじめは大変だなあと思っていたのですが、参加するうちに、大変ためになる貴重な企画であることを痛感いたしました。 ・ Higher-level educationの理念と手法を学ぶことができただけでなく、大学における教育に対する強い動機付けを得ることができました。これは、本当に考え方を180度転換させられたといっても言い過ぎではないと思います。 ・ 講師の準備がすばらしく、内容が豊富でかつ整理されていて、内容が理解しやすかった。受講者を含めて、雰囲気のうち解けていてよかった。 内容には、これまで経験的にはぼんやりと感じていたこともあるが、理論的に整理してもらって、すっきりし、方向性が明確になった。 パワーポイントの使い方など、実践的なヒントも多く、有用だった。 |
| その他の意見 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回の企画は、学内でまだあまり知られていないような気がします。英語で話をするということを除いても、自分の授業のやり方に独善的なところがなかったかどうかを反省する良い機会でしたので、多くの方が参加できるようなものに衣替えして欲しいと思いました。 ・ 周辺の同僚に話すと、もう少し参加期間が短ければ、自分も参加するのだが、という意見があった。実習を含んだ現行の形では、時間や人数上の制限はやむをえないと思うが、金曜のセミナーのようなエッセンスを教授する形でなら、これは可能ではないかと思った。 FDについては、食わず嫌いの人が少なくないので、場合によっては強制的な手段に訴えても、参加人員を増やすべきだと思う。 ・ 大変有効な講義なので、より多くの教員が受講することが大切だと思いますが、現状の実施体制では、これ以上の展開は困難だと思います。ぜひ、専属の担当者を設ける、あるいは日本語による定期的な開催を実施するなどを検討すると同時に、大学の制度として、教員として採用時、あるいは昇任時には必ず受講を義務付けるようにするなどを実施できればと思います。 |

